

批判主義に於ける自由の問題 (上)

中 林 嘉 太 郎

一

吾人は此の世に生を享けると共に既に一定の社會聯關 (Sozialzusammenhang) の中に於て在る。此の社會聯關は單なる個人としての吾人の力を以つて如何ともすべからざる一個の必然的勢力として、吾人に對し、吾人を取り圍いて存在する。吾人が呼んで以つて環境 (Umwelt) となす所のものは即ち之に外ならない。一個の必然的勢力として吾人に作用する所の社會聯關の中に於て、如何にして吾人は眞の吾人でありうるか。如何にして吾人は眞の吾人の個體性を獲得しうるか。茲に吾人の人生の根本問題はなければならぬ。而も此の必然的勢力として吾人に作用する所の社會聯關は、もとく自然聯關 (Naturzusammenhang) の一員たる吾人の身體の身體性 (Leiblichkeit) の對象化せられたるものに外ならないのである。即ち自然必然性によつて嚴密に規定されたる吾人の身體の身體性を綜括して之を對象化する所に、吾人

の環境たる社會聯關は成立するのである。(吾人の身體の身體性は、その欲望性に於て成立するが故に、その綜括の對象化たる社會聯關は、また諸欲望の體系としても見られ得るであらう。)従つてそれが一個の必然的勢力として吾人に作用するは、もとより當然でなければならぬ。それは本來の自然必然性をではないにしても、而も一種の必然性を根柢として立つ。是の如き必然性は、自然聯關の自然必然性 (Naturnotwendigkeit) に對して、まさに社會聯關の社會必然性 (Sozialnotwendigkeit) とも呼ばるべきものである。必然性たることに於ては兩者何の選ぶ所もない。而も社會必然性が吾人の身體の身體性の對象化によつて成立せるものであり、更に此の身體性は自然必然性によつて嚴密に規定されてゐるとすれば、社會必然性と自然必然性とは、吾人の身體の身體性を媒介として聯結すべきもの、或は社會必然性は本質的には畢竟自然必然性に還元さるべきものである。茲に於て社會聯關に於ける吾人の個性の獲得の問題は、轉じて自然聯關に於ける吾人の自立性の把握の問題となる。それは單に狹義に於ける自然必然性からの吾人の解放を問題とするものではなく、反つて廣義に於ける自然必然性、即ち社會必然性及び本來の自然必然性を包括しての、必然性一般からの吾人の解放を問題とする。自然必然性が必然性の基本的なるも

の、代表的なるものたる限り、それはもとより當然のことではなければならぬ。かくして吾人の人生の根本問題は、此の自然必然性によつて、嚴密に規定されたる吾人が、如何にして此の自然必然性に規定され乍ら而も之を超えて眞に自由でありうるか、といふ問題に歸着する。人類の思索の全歴史を貫く所の絶對者或は無限者の把握への形而上的要求は、凡て此の吾人の自由の把握への努力の表現に外ならないのである。被制約者 (Das Bedingte) が無制約者 (Das Unbedingte) を追求することに於て、吾人の哲學的思索 (philosophieren) の根本意義は成立する。吾人が茲に問題とせんとする所の批判主義も亦、この哲學の根本問題たる自由の問題に對して根本的の解決を試みんとするものである。それは單に自由の可能性のみならず、その現實性までも確認する點に於て經驗主義と異なり、また自然因果律による宇宙の嚴密なる規定を承認し、宇宙現象に對する自由原因の時間上の影響を否定する點に於て合理主義とも異なる。かくして批判主義は哲學史上その獨自なる位地に立つ。それは自由の問題に對して餘蘊なき解決を與へざるまでも、少くともその問題の解決の不可缺の條件を發見し、之を定立せる點に於て永久的意義を有する。吾人が茲に批判主義に於ける自由の問題に就て論述せんとするのは正に之に因るものである。

二

批判主義の根本問題は固より人間自由の發見に在る。然し乍ら夫は決して自然的存在者としての吾人の存在を嚴密に規定し、而して又この宇宙を貫いて之に統一を與へる所の、自然必然性の支配を無視して、以つて吾人自身の自由を主張せんとするものではない。是の如き態度は寧ろ批判主義の精神に最も遠きものである。この世界が自然因果律によつて普遍的に規定され、従つて又此の世界の一員たる吾人の存在も夫によつて嚴密に支配されてゐることは、批判主義と雖も素より之を承認するものである。否寧ろ之を積極的に主張せんとすることこそ批判主義の根本精神でなければならぬ。此の點に於て批判主義は純然たる經驗主義である。主觀と客觀との嚴密なる一致に於て成立する吾人の理論的認識の對象界は、正に夫が形式と内容との嚴密なる一致によつて成立する世界なるが故に、吾人が此の世界に就て述語しうることは、夫がたゞ自然因果律によつて普遍的に支配されてゐるといふことのみである。よし主觀に對立する客觀を定立し、主觀と客觀との一致によつて吾人の認識を説明せんとする一致主義の立場が、獨斷主義に陥るとの理由を以つて、

主客を對立せしめる立場を排し、純粹に認識主觀の構成作用によつて吾人の認識を説明せんとする立場に立つとしても、是の如き認識主觀の構成に係はる認識對象は、依然として自然必然性の支配する世界でなければならぬ。更に又是の如き構成主義の立場は空虚なる抽象理論に陥るとの理由を以つて、吾人の思惟を生産的なものとし、この思惟によつて生産されたる内容の形式による形成によつて吾人の認識を説明せんとしても、而も是の如き認識の對象界は尙依然として自然因果律によつて規定される世界でなければならぬ。かくして吾人は吾人の認識の批判に關して、一致主義、構成主義或は形成主義の何れの立場を採らうとも、吾人の認識の對象界が自然必然性によつて普遍的に規定されてゐることに就ては何等の異論も有ら得ないのである。吾人が此の世界に就て云ひ得ることは、たゞ夫が必然性の世界であるといふことのみである。此の世界に關する限り、吾人は何等自由なるものに就ては語り得ないのである。固より此の世界に於ては、單に自然因果律のみを以つて説明すべからざる偶然的なる現象が存在し、又生起しうるでもあらう。然し乍ら夫は單にその現象の原因が、現在の吾人にとつて不可解であるといふのみであつて、その現象が自然因果律によつて支配されてゐないといふことを意味するものでは

ない。自然因果律によつて支配されざる自然現象なるものは吾人の思惟し能はざる所である。現象界はたゞ自然因果律によつて嚴密に規定される限りに於てのみ、始めて現象界でありうるのである。吾人は此の現象界の自然必然的規定、従つて又此の現象界の一員たる吾人自身の存在の自然因果的規定に對して、何等の抗言をもなさんとするものではない。否寧ろ從順に之を承認せんとするものである。此の點に於て吾人は徹底經驗主義の立場に立つものである。(吾人が茲に經驗主義と呼ぶ所のものは、固より單に吾人の認識の起源に關する一個の理論を捉へてのことではない。夫は固より之と關聯を有するにはしても、更に之よりも擴張されたる、最廣の意義に於ける經驗主義、即ち世界に於ける凡ゆる理想的なるもの一般を否定して、すべてを唯因果の法則によつて説明せんとする主義を意味する。従つて夫は正に實證主義とも呼ばるべきものである。カントが純粹理性の二律背反第三節〔B, 406.〕に於て、二律背反の定立に對する反定立の立場を代表するものとして用ひたる經驗主義なる概念は正に之に相當するものであらう。)

以上吾人は經驗主義と歩を共にして出發し、而して又その主張内容を全部之を承認した。然し乍ら果して吾人は之に満足し、茲に止まることが出来るであらうか。

吾人は吾人の存在の一面が自然必然性によつて嚴密に規定されることは固より之を承認し、又甘受する。然し乍ら吾人の存在の全面が自然因果律によつて殘る隈なく規定されるといふことは、到底吾人の堪へ能はざる所である。茲に於て吾人は更に歩を進めて、此の必然の世界を超えたる自由の世界の探求に旅立つのである。

自由の世界の探求に當つて先づ吾人に迫り來る所のものは、即ち現象界(Phaenomenon)と本體界(Noumena)とを峻別し、必然の世界たる現象界を超越して其の彼岸に存在する本體界に於て、吾人の自由の世界を求めんとする所の合理主義の立場である。實に此の現象界を超越せる本體界への憧憬こそは、人類の哲學的思索のアルファであり又オメガでなければならぬ。夫々の時代に於ける夫々の哲學體系は、凡てみなある意味に於ては此の憧憬の體系的表現に外ならないとも云ひ得るのであらう。合理主義に對して對蹠的立場に立つ經驗主義と雖も、決して始めより現實界を超越せる理想界を求めないのでなく、たゞ是の如きものを追求せる結果、何等理想界なるものなしといふ結論に到達したまでである。發足點に於て理想界を求めて出發せることは、合理主義と何の選ぶ所もない。經驗主義的思索そのものが一個の理想の追求によつてなされてゐるとも云ひ得るであらう。然し乍ら現象界を超

越してその背後に、或はその根柢に、又はその彼岸に存在する所の本體界なるものに就ては、知識の上からは、吾人は之に對して何等の敘述をもなしえないのである。實に批判主義哲學の根本課題の一つは、是の如き形而上學の嚴正批判に在つたのである。吾人は何故に是の如き形而上學に對して批判を加へざるを得ないのであるか。夫は即ち此の形而上學が一個の獨斷の上に立脚してゐるからである。此の形而上學に於ては、現象界を超越せる本體界を吾人の認識の對象界として定立する。然し乍ら一個の世界が吾人の認識對象界たりえんがためには、吾人は此の世界に關して此の世界の感性的直觀なるものを有たなければならぬ。此の感性的直觀と悟性的思惟とが結合して、茲に始めて吾人の認識對象界は成立するのである。従つて現象界を超越せる本體界が吾人の認識の對象界たりえんがためには、吾人は此の本體界に關する感性的直觀を有たなければならぬ。然るに吾人の感性的直觀は現象界に關してのみ始めて意義あるものである。本體界に關しては吾人は何等の感性的直觀をも有ち得ざるものである。かくして吾人は本體界の認識に關して、その認識の可能條件の一たる感性的直觀を缺くが故に、本體界は元來吾人の認識能力の範圍以外に在るものである。此の吾人の認識能力の可及的範圍以外に在る本體界に

斷して、批判主義以前の形而上學に於ては、吾人の感性的直觀に對して知性的直觀なる認識能力を設定し、之によつて吾人の本體界の認識を可能的として説明せんとする。然るに知性的直觀なる能力はたゞ無限の立場に立つ神に於てのみ許されうることであつて、有限の立場より以外に立つ能はざる人間に對しては許されうべくもない。吾人人間に對して許すべからざる知性的直觀なる能力を導入し、之を構成原理として以つて本體界に關する吾人の認識を可能なりとして説明せんとする所に、此等形而上學の獨斷は成立する。批判主義以前の形而上學が獨斷主義と呼ぶべきものは正に茲に存する。知性的直觀なる認識能力が吾人有限者に對して許容さるべきものならざる以上、此の認識能力を根柢として立つ所の獨斷主義形而上學なるものは、當然吾人の承認し能はざる所である。吾人は現象界を超越せる本體界なるものに就ては、認識の立場からは何等の敘述をもなしえないのである。

三

吾人は必然の世界を超越して自由の世界を求め、而も之を現象界の彼岸に存在するものとせられたる本體界に於て求めることを斷念しなければならなかつた。然

し乍ら吾人は此の本體界なる概念を全然廢棄しなければならぬのであるか。惟ふに夫が吾人の知性的直觀の對象であるといふ積極的意義に於ては吾人は全然此の概念を放棄しなければならぬであらう。併し夫が吾人の感性的直觀の對象ではないといふ消極的意義に於ては、吾人は寧ろ此の概念を留保しなければならぬのである。吾人が本體界なるものゝ理論的認識を否定したのは、本體界そのものを否定したのではなくて、たゞその可認識性を否定したのみである。若し本體的なるもの一般を全然否定したとすれば、世界はたゞ現象的なるもの、必然的なるものゝみより成立することゝなり、従つて吾人は此の世界に於て何等理想的なるものに就て語り得ないことゝなる。是の如きは到底吾人の堪へ得る所ではない。吾人が茲に消極的なる意義に於ける本體界の概念を留保せんとするのは、正に此の徹底經驗主義、徹底實證主義の理想の世界に對する跳梁を抑制せんがためである。蓋し本體界を吾人の感性的直觀の對象に非ずとして之を吾人の可能的經驗の圏外に排除することは、感性的直觀と結合するに非ざれば何等の認識をも構成し能はざる所の吾人の悟性的思惟をして、本體界に全然容喙せしめざらんことを意味する。而して吾人の悟性的思惟は世界を機制化 (mechanisieren) する機能をなすものなる故に、本體界を

して此の悟性的思惟の干渉より自由ならしめることは、夫をして悟性的思惟の機制化より全然自由ならしめることを意味する。かくして始めて吾人は吾人の理想の世界を経験主義、實證主義の跳梁から保護することが出来る。即ち吾人が茲に消極的意義に於ける本體界なるものを定立せんとするのは、正に夫によつて世界機制化の能力としての悟性の越權を制限し、悟性をしてその止まるべき場所に止まらしめんがためである。吾人は斯くして一方積極的意義に於ける本體界なるものを、吾人の認識の立場に於て否定すると共に、他方消極的意義に於ける本體界なるものを、吾人の認識の限界を規定する限界概念として定立するのである。茲に於て批判主義と經驗主義とは截然として其の立場を別つ。自然因果律による宇宙の嚴密なる規定に關しては、批判主義は經驗主義と其の歩を共にする。然し乍ら此の自然必然界を超えたる別個の世界を、積極的意義に於てではなくとも、少くとも消極的意義に於て之を承認する點に於て、批判主義と經驗主義とは其の缺を別つのである。吾人は曩に經驗主義に讓歩して、世界の認識に關する悟性の獨裁を認容した。今や吾人は悟性の越權を制限して、吾人自身の立場を主張せんとするものである。吾人が自然界の認識に關して悟性の要求を承認し、經驗主義の主張を認容したのは、反つて夫に

よつて吾人の理想の世界に對する經驗主義の主張を全然無力ならしめんがためであつたのである。即ち經驗主義をして吾人の理想の世界に對して全然干涉せしめざらんがためには、始めより之を拒否抑壓する事なく、反つて一應に於て夫が正當に占有すべき場所を夫が占有すべき場所として承認し、而して再應に於て夫が正當に占有すべからざる場所までも占有せんとする越權行爲を抑制すべきである。自然の認識に關して悟性の正當なる權利を承認せざらんとすれば、理想の世界に對する悟性の機制化作用を否定することは出来ない。理想の世界を悟性の機制化より自由ならしめんとすれば、現實の世界に於ける悟性の正當なる支配權利を認容せざるを得ないのである。かくして吾人は自然の世界の認識に對する理性の直接支配を惜みつゝも、理性自身の世界を喪失することを恐るゝを以ての故に、心ならずも之を斷念し、自然の認識を悟性に一任したのである。固より吾人と雖も吾人の認識對象界たる此の自然界に於て、時間的に宇宙の因果系列に干涉し、積極的に宇宙現象を生起せしめる所の自由原因なる理性概念を定立し、以つて自由なるものゝ可感的實在性を證明したのであるが、然し是の如きは到底吾人の悟性の要求の認容せざる所である。吾人の悟性の頑強は到底宇宙現象に對する自由原因の時間的干涉を承

認しないのである。然し乍ら自然はたゞ悟性的認識の對象としてのみ其の存在が可能であり、而して悟性的認識は嚴密なる自然因果律による認識として始めて悟性的認識であるとすれば、自然の認識に關しては吾人はたゞ悟性の要求を容れ、理性の要求を却けざるを得ないであらう。理性は悟性が支配すべき自然認識の世界に直接に干涉することによつてははなく、反つてたゞ此の世界を悟性に全然委任することによつて始めて理性であり、また自由でありうるのである。

吾人は上の如くにして消極的ながらも本體界なる概念を導入した。固より夫は何等積極的なる別個の世界を意味するものではなく、反つてたゞ一個の限界概念として機能すべき領域を表はすにすぎない。然し乍ら吾人は之によつて世界を凡て機制化せんとする所の悟性的思惟の跳梁を抑止することが出来るのである。吾人の可能的經驗の範圍以外にある所の本體界なるものに就ては、吾人の可能的經驗に關してのみ其の機能を發揮しうる所の吾人の悟性は、此の世界が存在すると云ひ得ないと共に、また存在しないとも云ひ得ないのである。即ち吾人の悟性は本體界に關しては、その存在に就て肯定否定何れの斷定をもなしえないのである。夫は此の世界に對しては全然發言の權利を有せざるものである。かくして吾人は此の自然

必然界ならざる世界を根柢として立つ所の道德宗教等の理想の世界を、消極的ながらも實證主義の攻撃から解放することが出来る。實に此の限界概念としての消極的なる意義に於ける本體界の概念の想定に於て、理想主義としての批判主義の第一の根柢は据置せられたのである。

四

吾人は上に於て消極的ながらも限界概念としての本體界(物自體界)の概念を定立し、夫に依つて吾人の理想的要求の聲を剿滅せざらんことを期した。然し乍ら吾人は果して是の如き消極的解決によつて吾人の形而上的要求を満足することが出来るであらうか。たとへ本體界の認識が吾人の認識能力の可及的範圍を超越し、吾人は之に就て認識の立場より何等の敘述をなしうべからずとするも、而も吾人は此の現象界を超越せる本體界を想定し、之を種々に述語し、夫によつて現象の系列を綜括包攝し、更に現象界と本體界とを同一化して以つて無限の把握を要求する吾人の理性を満足せしめんとする。夫は規則の能力として機能する悟性に對して、原理の能力として機能せんとする吾人の純粹理性の自然的にして、而も不可避的なる要求で

なければならぬ。形而上學が人間理性の素質として見られる所以も茲に存する。吾人は形而上學が一個の學問として成立することの不可能なることを熟知しながら、而も吾人の形而上的要求を如何ともすることが出来ない。吾人が夫に就て認識を有ち得る所のものは、たゞ現象界のみに限り、この現象界を超越せる本體界なるものに對しては、吾人は之に何等の賓辭を與へ得ざるにも拘はらず、而も吾人は之に關して積極的に吾人の認識を構成し、之よりして吾人の現象界の認識を演繹せんとする。茲に於て所謂純粹理性の二律背反なるものが生じ來るのである。夫は凡そ哲學史上夫々の時代に於て夫々の形態を以つて現はれ得べき思想の二大潮流、即ち經驗主義と合理主義との對立を表はす。經驗主義が世界を悉く機制化して、凡ゆる理想的なるものを總て否定せんとするに對し、合理主義は凡ゆる現實的なるものを總て吸収して、世界を悉く合理化せんとする。かくして現實を根柢として立つ經驗主義と、理想を根柢として立つ合理主義とが永久に鬭争の状態に置かれるのである。而してこの二大思潮の對立を表はす所の純粹理性の二律背反なるものは、もとこれ被制約者の世界に於て、この世界の被制約性を超越せる無制約者の世界を求め、無制約的世界の認識によつて被制約的世界の認識をも説明せんとする所の、吾人の純粹

理性の辨證性より由來せるものである。換言すれば純粹理性の二律背反とは即ち被制約的世界にのみ適用せらるべき純粹悟性概念即ち範疇の絶對化より生起せる結果に外ならない。従つて吾人は範疇の二種類に對應して二律背反にも亦數學的の二律背反及び力學的の二律背反の二種を區別することが出来る。此の兩者の中數學的の二律背反は、元來吾人の認識對象たりえざる所の宇宙全體を問題とする虚偽の假設の上に立脚して論議を進めてゐる故に、その定立及び反定立共に成立しえない。然し乍ら力學的の二律背反は、その假設が吾人の理性の要求と一致しうる所のものであり、而して正當なる審判によつて定立及び反定立の兩者が互に對者の權利根據を犯さざる様になしうるが故に、吾人は一定の方法によつて此の二律背反の定立及び反定立を同時に眞理なりとして許す事が出来る。茲に於て吾人は被制約的世界たる感覺界の概念に對して、無制約的世界たる審知界の概念を導入せざるを得ないのである。感覺界の概念に對して審知界の概念を導入し、而して力學的の二律背反の定立を審知界に關するもの、反定立を感覺界に關するものとする事によつて、吾人は吾人の純粹理性をしてこの二律背反から脱却せしめることが出来る。吾人の純粹理性の二律背反はもとゞ世界を悉く合理化せんとする理性の要求に對して、世界を

凡て機制化せんとする悟性の要求が對抗することによつて生ずるものなるが故に、吾人は茲に徹底的合理化に値する所の睿知界と徹底的機制化に値する所の感覺界との二個の世界を對等に定立し、理性をして睿知界をのみ司どらしめて感覺界に干渉せしめず、また悟性をして感覺界をのみ司どらしめて睿知界に干渉せしめざることに、はじめた兩者の要求を充分に認容しつゝ、而も相互に對者の領域を犯さしめざる所の、嚴正中立の立場よりこの二律背反を解決することが出来る。批判的觀念論が二律背反解決の鍵鑰としてみられる所以は正に茲に存する。もとより茲に導入せられたる所の睿知界なるものは、何等合理主義に於けるが如き知性的直觀の對象界ではない。然し乍らそれはまた吾人の自然認識の限界を規定する所の單なる限界概念でもないのである。茲に導入せられたる所の睿知界は認識不可能ではあるが、然も思惟可能である (unerkennbar, aber denkbar) 所の一個の理念の世界である。この可認性の對象 (Gegenstand der Erkennbarkeit) として、はななく、たゞ可思性の對象 (Gegenstand der Denkbarkeit) としてのみ、吾人は獨斷主義に陥ることなく、而も現象界と異なる所の本體界なるものを思惟することが出来る。而してこの可思性の對象としての睿知界の概念の導入によつて理想主義としての批判主義の第二の根柢は据置せ

られたのである。吾人は吾人の認識の對象として、ハはなくとも、少くとも吾人の思惟の對象として、現象の根柢としての物自體に就て語ることが出来る。茲に於て吾人は三に於て導入せられたる限界概念としての第一の物自體概念に對し、現象の根柢としての第二の物自體概念に接するのである。この第二の物自體概念の導入によつて理性は一應その要求を満足せしめることが出来るであらう。

五

吾人は消極的なる限界概念としての物自體界の概念に満足する能はず、而も獨斷主義に陥らざらんことを心掛けて、茲に可思性の對象としての物自體界の概念、即ち容知界の概念に到達した。今や吾人が二の劈頭に於て批判主義の根本問題として提出せる自由の問題は、正に此の可思性の對象としての容知界の概念の導入によつてその解決が可能となるのである。もとより此の感覺界の根柢としての容知界の概念の導入によつて説明可能となる所の自由は、本來の意義に於ける自由、即ち實踐的自由そのものではない。然し乍ら此の實踐的自由は、たゞ容知界の概念の導入によつてのみ説明されうる所の自由、即ち先驗的自由を根柢として始めて其の本性が

解明されうるものである。従つて吾人は自由の問題の解決に當つては、先づ先驗的自由の概念を問題とし、次に實踐的自由の概念に就て考察すべきである。然らば先驗的自由とは抑如何なるものを意味するか。

先驗的自由とは云ふ迄もなく夫自身何等の原因によつて時間的に先行せらるゝことなき自己原因として、自己自身によつて一定の状態を將來する所の絶對自發性 (Die absolute Spontaneität) を意味する。カントが「……自然律に従つて経過する所の現象系列をみづから、始むべき原因の絶對自發性、即ち先驗的自由……」(B, 77)といふのもこれを云ひ表はせるものに外ならない。勿論此の場合先驗的自由は單に原因として絶對自發的に作用するのであつて、その作用の結果は感覺界に於て成立するもの、或は感覺的者其者であるのである。此の點に於て先驗的自由は超越的自由及び經驗的自由——假りに是の如き等の自由をも、なほ可能なりとして想定するならば——とその本性を異にする。超越的自由も固より絶對自發性として作用するのであるが、たゞ其の作用の結果までもが依然として睿知界に止まつて、感覺界にまで及んで來ない所の、或は感覺的者其者とならない所の自由である神の自由。また經驗的自由は其の作用の結果のみならず、其の原因までもが依然として感覺的者其者

である所の自由である(物の自由)。此等の自由は茲では問題となりえない。茲に問題となる所の自由は超越界固より何等かの形而上學的實在に非ず、單に批判的觀念論の立場より正當に承認せらるべき理念にすぎない)並びに經驗界の兩界に跨がり、睿智的原因として作用して感覺的結果を惹起する所の自由である。夫はおのづから超越的自由 (Die transzendente Freiheit) 及び經驗的自由 (Die empirische Freiheit) とは其の本性を異にしなければならぬ。吾人は是の如き自由を呼んで先驗的自由 (Die transzendente Freiheit) と云ふのである。

而して此の絶對自發性としての自由の概念が、本來の意義に於ける先驗的自由の概念であるが、この積極的意義に於ける自由の概念の裏面には、その消極的意義として、凡ゆる經驗的制約一般から全然獨立なる能力としての自由なる概念が包藏されてゐる。夫はカントが「……先驗的自由は(現象系列を始むべき其の因果性に關して)感覺界の凡ゆる規定原因からの此の理性自身の獨立性を要求する……」(B. 83.1.)と云つてゐるのに徴しても明瞭であらう。此の消極的なる絶對獨立性 (Die absolute Unabhängigkeit) としての自由によつて裏附けらるゝことなければ、絶對自發性としての自由も、其の完全なる意義を獲得するに由ないであらう。又絶對自發性として積極

的に作用することなくしては、絶對獨立性としての自由も、其の意義を完成するに由ないであらう。此等消極積極兩義に於ける自由が合致して茲に始めて完全なる先驗的自由の概念が成立するのである。否寧ろ渾然たる一個の先驗的自由を、その表面より見れば絶對自發性となり、その裏面より見れば絶對獨立性となるのである。

然し乍ら茲に絶對獨立的能力としての先驗的自由が、絶對自發的能力として作用して、現象系列をみづから始めるとは、云ふ迄もなく先驗的自由の能力が絶對自發的原因として積極的に自然必然性に干涉し、以つて時間的制約の下に於ける現象系列をみづから生起せしめることを意味するのではない。夫は唯自己自身現象系列の外に在り、而も此の現象系列に就て、部分としての夫をではなく、反つて總體としての夫をみづから始むべき原因の能力として想定せられたる所の、單なる先驗的理念に過ぎないのである。經驗的なる現象其者に關しては、先驗的自由の能力は固より何等の交渉をも有ち得ざるものである。従つて吾人は單に認識の立場に止まる限り、何等先驗的自由の現實性なるものに就ては語り得ない。何者吾人が認識の立場に於て其の現實性に就て語り得る所のものは單に經驗的なるものゝみに止まり、而して此の先驗的自由は經驗の領域以外に在るからである。また吾人は單に經驗の立

場に止まる限り、何等先驗的自由の可能性をも證明しえないのである。蓋し單なる先驗的理念からは、經驗の範圍以内に於ては吾人は如何にしても其の經驗的實在性及び經驗的因果性に關する可能性を認識しえないからである。茲に於ては先驗的自由はたゞ現象の系列を端的に始むべき能力として見られたる單なる先驗的理念にすぎない。是の如き單なる理念にすぎざる先驗的自由を経験の可能性の原理として見るとき、茲に不可避なる純粹理性の二律背反が惹起され、而して先驗的自由の理念其者の存立が懷疑の對象となる。夫は吾人の經驗の世界を唯一の世界として主張する時に起る可き當然の歸結でなければならぬ。然し乍ら吾人は少くとも吾人の認識の對象界たる感覺界に對して、吾人の信仰の對象界たる睿知界を對立せしめることを可思的なりとして許容しうるが故に、此の可思的世界としての睿知界に於て、吾人は一方凡ゆる經驗的制約一般からの絶對獨立性としての、他方現象系列一般に對する絶對自發性としての先驗的自由なる理念に就て語ることが出来る。吾人は一方感覺界に於ける原因として、此の原因の性格即ち經驗的因果律を有ち、此の因果律に従つて行爲するに對し、他方睿知界に於ける原因として、此の原因の性格即ち睿知的因果律を有ち、此の因果律に従つて行爲すると思惟することが出来る。

かくして吾人の同一主観の同一行為に於て、經驗的性格と睿智的性格とは同時に成立すると思惟することが、夫自身矛盾せざるが故に、吾人は此の點に於て安んじて吾人の先驗的自由に就て語る事が出来る。夫は固より何等論證による事柄ではない。而も尙嚴として否定すべからざる吾人自身の確信でなければならぬ。吾人の自由の最初の根柢を形成する所の先驗的自由の理念は、かくして徹底消極的ながら、而も立派に其の命脈を保證されたのである。實に此の自然必然性に對して、些かの干犯をもなすことなく、而も自由の世界をたとへ論證によつていはなくとも、然も確信によつて確立し得た所に、批判主義の不朽の意義は存しなければならぬ。もとより是の如き、自然必然性に對して何等の事實的交渉をも有せざる自由が、果して最高の自由の名稱に値するか否かは疑問に屬する所であらう。然し乍ら如何なる自由概念と雖も、それが眞に自由概念たりえんがためには、一度は必ず自然と自由との是の如き峻嚴なる批判的甄別の段階を経なければならぬのである。この凡ゆる自由概念が一度は必ず通過すべき不可避的關門を定立した點に於て、吾人は批判主義の永久的價值を見るのである。

六

以上吾人は先驗的自由の理性概念に就て、其の意義及び其の可思性等を考察し來つた。然らば吾人は何故に是の如き先驗的自由の理念を導入定立しなければならぬのであるか。夫は云ふ迄もなく本來の意義に於ける吾人の自由、即ち實踐的自由の基礎確立に在るのである。換言すれば道德の世界を自然の世界より解放せんがために、その豫備段階として採定せられたものが即ち先驗的自由に外ならないのである。蓋し道德の世界は吾人の意志の自由を根柢として立つが故に、若し吾人の意志にして其の行爲の動機及び結果に於て全然自然必然的に規定されたりとせば、道德の世界は當然其の成立が不可能に歸さなければならぬ。然し乍ら是の如きは到底吾人の實踐生活に於ける確信と一致せざる所である。従つて吾人は道德の世界の成立可能性を保證せんがために、吾人の意志の自由を豫定し之を確立しなければならぬ。然し乍ら吾人の意志は單に孤立的存在として個々別々に存在するものではなく、自然必然性の原理によつて貫通されたる自然聯關の一員として存在する所の吾人の意志として存在し、而して其の限りに於て自然必然性によつて規定

されてゐるのである。従つて吾人が吾人の意志を自然必然性より解放し、その自由を確立せんとすれば、吾人は先づ自然必然性の原理によつて貫通されてゐる自然聯關の總體に於て、自己はこの總體の外に在つて而も此の總體をみづから始むべき能力としての自由の理念を想定し、然る後是の如き自由を自然聯關の一員たる吾人の意志の特性とする方法を探らなければならない。これ道德の世界の基礎を確實にせんがために、先驗的自由の理念を想定しなければならなかつた所以である。夫はカントが其の純粹理性批判第二版序文に於て「さて道德は必然的に自由(最も嚴密なる意味に於ける)を吾人の意志の特性として假定し、……、然も思辨理性が之は全然思惟しえないといふことを證明したとせよ、然る時は必然的にかの假定、即ち道德的假定は、その反對が明らかなる矛盾を含むものに屈從しなければならぬ、従つて自由及び夫と共に道德(何者最早自由が假定されなければ、その反對は如何なる矛盾をも含まないから)が自然機制に場所を譲らなければならない。然し乍ら自分は道德のために、自由は自己自身たゞ矛盾せず、従つて夫以上洞察する必要なしに、なほ少くとも思惟しえ、従つて正に同一行爲(他の關係に於て採られたる)の自然機制に全然何等の妨碍をもなさないといふこと以上には何事をも用ひない故に、倫理學は

其の場所を主張し、而して物理學も亦其の場所を主張する、此の事は然し乍ら批判が吾人に先づ物、其自體に關しての吾人の不可避的無知性を教へ、而して吾人が理論的に認識しうる所のもの凡てを單なる現象に制限しなかつたならば起らなかつたであらう。(B. XXXVIII—XXXIX.)と斷言してゐるのに徴しても明らかに看取しうる所である。(此の意味に於て純粹理性批判は一個の「倫理學の基礎附け」Die ethische Grundlegung」としても見られうるであらう。)彼は茲に「自分は道德のために、自由は自己自身たゞ矛盾しないといふことの外には何事をも用ひない」といつてゐるが、夫自身矛盾しない所の自由は即ち先驗的自由に外ならない。以つて彼の先驗的自由の理念の想定の目的が道德の世界の基礎確立に在つたことを知る可きである。夫故に先驗的自由は元來實踐的自由に對する豫備段階として見らるべきである。従つて夫が單なる消極的可思性をのみ有するに止まることは固より當然でなければならぬ。蓋し理論的領域(Die Sphäre des Theoretischen)より自由の能力の積極性を全然排除して、之を單に統制原理として、絶對消極的なる可能性を有するに過ぎざる理念に止まらしむることは、本來そのこと自身が窮極目的的なのではなくて、やがて之を實踐的領域(Die Sphäre des Praktischen)に移置するとき、之をして絶對積極的に活動せしめん

がためである。理論的領域に於ける自由の概念の消極的定立は、實踐的領域に於ける自由の概念の積極的定立への豫備事業として見らるべきであらう。此の點に於て先驗的自由と實踐的自由とは密接に聯結する。夫故にカントは「自由の先驗的、理念にその實踐的概念が基づくといふことは、頗る注目すべきである」(Pr. 5. 1.)と云つてゐる。従つて先驗的自由は實踐的自由にとつて必要缺く可からざるものである。先驗的自由は實踐的自由なくとも、或は存在しうるでもあらう。然し乍ら實踐的自由は先驗的自由なくしては全然存立しえないのである。何者實踐的自由は吾人の實踐生活に於て吾人の意志が凡ゆる感性的衝動から獨立に、絶對自發的に作用する所に於て成立し、而もこのことは唯先驗的自由を豫想して始めて可能であるからである。「従つて先驗的自由の廢棄は同時に實踐的自由を絶滅するであらう。何者之は、たとへ或事が生起してゐずとも、而も尙それが生起してゐなければならぬ」といふことを假定するから」(Pr. 5. 2.)。實に先驗的自由は實踐的自由の不可缺的條件 (conditio sine qua non) であるのである。而も先驗的自由は夫自身何等實踐的意義を有しない。夫は唯倫理學的に轉釋され、實踐的自由に轉化して始めて其の現實的意義を獲得するのである。換言すれば、先驗的自由は、道德化 (moralisieren) 或は、實踐化 (prakt-

Usurien) されて始めて其の現實性を有し得るのである。

然らば先驗的自由を道德化或は實踐化するとは抑、如何なる事を意味するか。夫は即ち先驗的自由の兩面を形成する所の、絶對獨立性及び絶對自發性を實踐的領域に移置して、之を道德の主體としての人間、即ち人格に歸屬せしめる事に外ならない。蓋し吾人が曩に「四」に於て可認性の對象として、はたなく、可思性の對象として、容知界なる物自體界の概念を定立したことは、よし夫によつて知性的直觀による容知界の積極的可認性を主張する所の獨斷主義に陥ることを避け得たとしても、而もなほ現象界の根柢としての容知界なるものを思惟する點に於て、依然として獨斷主義の色調を止めてゐると云はなければならぬ。吾人は歴史的のカントに於て、明瞭に此の獨斷主義の殘影を見る事が出来る。彼が「現象の根柢に横たはつてゐる先驗的對象、及び夫と共に、何故に吾人の感性が之を寧ろ他の最上制約として有つかと云ふ理由は、吾人にとつて不可究明的である」(B, 611—612) といつてゐるが如き、その適例でなければならぬ。吾人は今や此の容知界に於て成立可能として想定せられたる先驗的自由の理念を道德化或は實踐化し、客觀の根柢としての物自體の概念を主觀の根柢としての物自體の概念に轉置することによつて、始めて是の如き獨斷主義の

殘影を除去することが出来る。固より茲に是の如き物自體の概念を根柢として立つ所の主觀は、單なる心理的主觀ではなく、經驗的自己を超えて、其の根柢を形成する所の睿知的自己に透徹する底の倫理的主觀でなければならぬ。此の意志生活の主體たるべき倫理的主觀が、自己を限定して認識の方向に分化せるものとして、吾人は其處に論理的主觀なるものを考へることが出来る。本元的なるものは道德主觀であつて、認識主觀は單に之より分化せる派生的なるものとして見らるべきである。科學的眞理の探求が峻嚴なる道德的良心の豫想の下に於てのみ遂行可能であることは此の點からのみ理解されうる事柄である。是の如き、認識主觀の根源をすら形成するものとして思惟さるべき道德主觀の根柢としての物自體概念に於て、吾人は批判主義に於ける第三の物自體概念に逢着するのである。惟ふにカントが現象の根柢として考へたる先驗的對象(前掲)なるものは、固々是の如き吾人の人格の根柢として思惟さるべき物自體の概念を客觀界に投射して、之を可思性の對象として定立せるものに外ならないであらう。吾人は今や此の客觀の世界に投射されたる物自體の理念を、再び主觀の世界に回收し、之を吾人の人格の根柢として定立し、以つて吾人の道德的意識の根源たらしめんとするのである。茲に於て理想主義としての批判

主義の第三の根柢が据置せられたとも云はれうるであらう。吾人は曩に認識の限界としての物自體概念に出發し、次に現象の根柢としての物自體概念を獲得し、竟に人格の根柢としての物自體概念に到達したのである。此の世界に於て吾人は始めて吾人自身の自由に就て語る事が出来る。若しも物自體界なる概念を定立するものを形而上學と呼ぶならば、批判主義は其の意味に於て純然たる形而上學である。然し乍ら夫は認識の對象界としての物自體界を定立する思辨的形而上學ではなくて、たゞ思惟の對象としての物自體界を人格の根柢に据置する所の實踐的形而上學である。是の如く世界の根柢としての物自體界に於ては、たゞ人格の根柢としての物自體界に於て、吾人は始めて吾人自身の自由に就て語る事が出来る。是の如き自由は即ち實踐的自由に外ならない。仍つて吾人は次に之に就て論ずるであらう。